

『「議論」のデザイン』メモ

<http://tomag.exblog.jp>

by tomac





記念に代えて

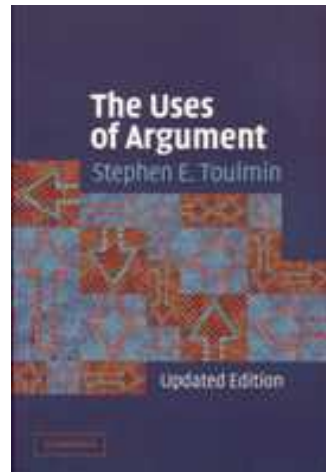
2007-09-04 13:08

ここ数年、ずっと縛られ続けてきた仕事から、ようやく解放されました！博士論文の出版にむけて原稿の送付を終えたところです。心身ともに軽くなりましたね（笑）

口頭諮問は昨年の7月31日でしたが、まだ治療を始めたばかりだったこともあり、反論や弁明をする力はなく、質問に応答するのが精一杯でしたが、あのときご指摘いただいたいくつかの点を一つひとつ修正して、なんとか自分なりに納得のいく形に仕上げることができました。実際に本ができあがるまでには半年ほどかかるそうですが、2008年の出版となれば、ちょうど、この『The Uses of Argument』（Stephen E. Toulmin, 1958）から50年後にあたり、それは感慨深いことだな...と勝手に思っています（笑）。

議論学をかじった人なら誰もが知る本ですが、著者の意図とはまったく別の次元で、ある分野では広く流通し、ある分野では、こてんぱんに批判されてきました。

本というのは、いったん世に送り出したら一人歩きを始めます。こわくもあり、面白くもありますね。この本についてはいろいろな解釈や批評があるのですが、とにかく1958年に出版された本が、半世紀近い時を経て、改訂版（2003年）を出したわけですから、すごいことです。



もっとすごいと思うのは、本に込められたメッセージが時間と空間をこえて名もない一介の研究者のもとに届き、新たな本を生み出す種になったということです。

どれだけ批判されようと、発信されたメッセージは色あせてはいない。

というのが、私の研究者としての立場です。そして、

一生に一度でいいから、そういう本を自分も書きたい。

そう思ってがんばってきました。いつか誰かに届いて小さな種になる日を夢見て...

でも、もう二度と、こんなしんどい仕事はしたくないです（笑）



『「議論」のデザイン』 刊行！

2008-09-20 11:50



こちらは、『「議論」のデザイン』です。やっと刊行にいたりました。思いの外、時間がかかってしまいました。お待ち下さっていた方、長い間お待たせいたしました。関西大学総合情報学部の牧野由香里先生の「議論学」自体の創出を目指した挑戦的な力作です。

コミュニケーション研究と教育工学の接点に位置する議論のデザインをめぐる488ページにわたる大著です。議論自身を巡る

様々な議論そのものが、この本から始まることになるのではないのでしょうか。最後の締めは、板東が行いました。デザインは伊高純子さんです。

—ひつじ書房ホームページより—

[ひつじ書房のホームページはこちらからどうぞ](#)

もったいないご批評を頂戴し、身に余る光栄に存じます。長い長い道のりでしたが、辛抱強く、ともに歩んでくださり、本当にお世話になりました。

出産のたとえで言うなら、松本功社長・編集長は、妊娠してからずっと経過を診てくださった産婦人科のドクターです。最後の製作を担当してくださった板東詩おりさんは、出産を控えた入院中にお世話をしてくださいました看護師さんでしょうか。

装画・装丁を引き受けてくれた伊高純子さんは、20年近い付き合いの古い友人ですが、本人のことは借りれば、「分娩室で出産に立ちあった旦那みたいな役割だった」そうです（笑）

ドクターにとっても、看護師さんにとっても、旦那さんにとっても、さぞかしムツカシイ妊婦だったことでしょう...

どうもありがとう。



心の中に生きる人

2009-03-13 12:00

『「議論」のデザイン』（ひつじ書房）は、米国の大学院に留学中のエピソードから始まり、その後さまざまな文脈で出会った人たちとの学びあいの記録をあちこちに盛り込んでいますが、実際には、本の中には登場しない人（つまり、研究とは直接関係のない人）もいて、その人たちはひっそりと、私の心の中で生きつづけます。

米国の大学院に留学しようと思えば資金が必要ですから、大学を卒業して3年3ヶ月システムエンジニア（SE）として働きました。このときの経験が今になって活かされるなんて、そのときは想像できなかったです。それから、幸運にもロータリー財団の奨学金をいただき、金銭的に助かったのはもちろんですが、現地のロータリー活動に参加させていただけたのも貴重な財産になりました。

毎年毎年たくさんの留学生が世界中にあふれているわけですから、ホストといっても名前だけの形式というケースは珍しくないはずですが、自分はとって恵まれてたんだなあとふりかえるのは、私を迎えてくださったホストロータリアンが心の底から尊敬する人格者だったことです。いつも丁寧に温かく導いてくださいました。

その方は市長（というよりはやや小規模の自治体かな）をされていたので、たかが留学生の私なんかのためによく時間を割いてくださったものだなあ、と思い返していますが、月一回のペースで、地域の各ロータリークラブの定例会に連れて行ってくださり、そこでスピーチをする機会をつくってくださいました。その経験からパブリックスピーキングの実践について本当に多くを学びました。

そして、会場までの往復のドライブで、私は夢を語り、その方は米国の建国理念についてわかりやすく話して聞かせてくださいました。オバマ大統領が歴史的な勝利演説をしたときは、自然とその方のことが思い出されました。

当時熱く語っていた夢がかなうまで、と思いつつ、ずっと連絡できずにいたのですが、先日思い切って人づてに連絡をしてようやくコンタクトがとれました。数年後に定年を迎えたその方が今まさに生きている人生は想像していたものとは異なるものでしたが、ホストロータリアンと留学生という関係とは違う、別の形の交流が始まるのかもしれない...



人生の折り返し地点

2009-03-16 15:00



仕事だけが人生ではないけれど、職業人生というものがあるとしたら、たぶん今が折り返し地点だろうなと思っています。『「議論」のデザイン』(ひつじ書房)を出版できたことは、植物の人生にたとえると、ようやく一つ、花が開いたあたりでしょうか。このあと、綿毛をつけた種たちが旅立つわけですが、はたして風にふかれたその先でどこにたどりつくのかはわかりません。自分にできるのは、一つひとつを丁寧にこしらえて、ふわふわの綿毛で包むことでしょうか。

とりあえず、**裁判員制度**とか、**教員免許更新制**とか、まもなく始まる新しい制度にはもちろん賛否両論あると思いますが、私にとってはまちがいなく追い風になるはずです。

ただし、人生は何が起きるかわかりませんから、健康管理は怠らないようにしないと…。最初に自覚症状が現れたのはちょうど3年前になりますが、さきほど主治医と電話で話して検査の結果を確認したところ、治療のほうもようやく一つ区切りがつかしました。



届いてるんだ。

2009-09-30 12:14

突然のメール失礼いたします。私は、広島大学教育学研究科（国語）修士1年・幸坂健太郎と申します。研究内容は「論理的思考力を育成する国語カリキュラム」の研究です。研究を進める中で、先生の論文、著書（『「議論」のデザイン』）に出会いました。先生の論は、自分の中で新鮮な論でした。



メールさせて頂いたのは、先生の著書の内容に関する事です。私は、まだまだ勉強不足であり、ゆっくり先生の著書を読ませて頂いているのですが、第7章にきたところでどうしても理解できなくなってしまいました。著者である牧野先生に何うのが一番良いだろうと判断し、失礼ながらもメールを送らせていただいた次第です。お伺いしたいことは、以下の点です。私の理解不足からくる質問になってしまうかもしれませんが、ご容赦ください。もし先生にお時間ができましたら、返信くだされば幸いです。よろしくお願いいたします。

質問：（細かいことですがすみません。2点あります。）

1、p.157に「メッセージ構築の層」（第3層）には言語化・非言語化レベルの二極（証明・物語）があてはまる」とあります。しかし、p.136の表6.6を見てみると、「言語化・非言語化レベルの二極」には、5～8（「明示的」～「語りの」）があり、「証明・物語」は「受け手」の行にあります。これはどういうことでしょうか？

2、p.156の図7.5についてです。先生は、二次元の紙面上に表すことを断った上で、三次元の図を描いておられます。この図は、三次元上で、同じ大きさの層が縦に重なり合っているのか、それとも、上にいくほど層が小さくなっていくピラミッド型なのか、もしくは逆ピラミッド型な

のか、が判然としませんでした。図7.5から判断するに、自我層が一番小さく、世界層が一番大きいです。これを図7.4との関係で考えると、自我層が一番下、世界層が一番上ということになります。なので、先の3つのうち、逆ピラミッド型なのかな、と自分は考えました。この理解でよいのかどうか、というのをお聞きしたいです。

広島大学教育学研究科
幸坂健太郎さん

はじめまして、関西大学の牧野です。『「議論」のデザイン』は研究者向けの本なので、修士1年生の幸坂さんが（解説なしで）一人で読んで理解するのは、やや難しいかもしれませんね。でも、とても丁寧に読み込んでくれている様子が伝わってきましたよ。どうもありがとう。

実は、学期はじめのこの時期はとても忙しくて、じっくり回答を書く時間的な余裕がありません。ヒントをお伝えします。考えてみてください。

まず、質問2へのヒントですが、p.318の図13.1をご覧ください。この図とp.135の「小宇宙」が合体して全体像が描けたことになります。その意味では、質問1の疑問点は、全体像に至るまでの部品を個々に理解しようとしていることによるのではないかな？と思いました。

それから、言葉の違いにも着目してください。p.157「メッセージ構築の層」（図7.7の第3層）は、【メッセージ構築】であるのに対して、p.136の表6.6は【メッセージの共同構築】です。この言葉の違いがご理解いただけたら疑問が晴れるのではないかと思います。「メッセージ構築とは送り手と受け手の間で意味が共有された時点で成立する」という考え方です。

ちなみに、私からも質問していいでしょうか。この本を読み始めたきっ

かけは何でしたか？

牧野由香里

牧野先生

返信遅くなって申し訳ありません！お忙しい時期を考慮せずにメールしてしまったことをお詫びします。お忙しい中、ご丁寧な返信をくださりありがとうございます。

ヒントを拝受いたしました。また、(7章で躓きましたがそのまま読み進め、)『「議論」のデザイン』を読み終わりました。本の内容はまだまだ理解できていません...先生から頂いたヒントも、今熟考している最中です。ただ、この本は、私の研究、すなわち国語科における論理的思考力育成カリキュラムにとって、貴重な一冊になるのではないかと自分なりに判断しました。もっと多くの文献と照応させつつ、消化していこうと思います。もし先生からのヒントで内容が読み解けたならば、また連絡させてください。恥ずかしくない回答を考えます。宜しく願いいたします！

先生から頂いた質問に回答いたします。

河合塾の現代文講師でいらっしゃる成田秀夫先生に紹介していただきました。成田先生とは、広島大学で国語教育を研究しておられる難波博孝先生を通じて知り合いました。国語科では今、論証モデルとしては、往々にしてトゥルミンモデルが用いられています。成田先生から、「トゥルミンモデルについては牧野先生が論じていらっしゃる」ということを伺い、牧野先生の著書も、その際、同時に教えていただきました。成田先生が、牧野先生よろしく伝えてほしい、とおっしゃっていました。

広島大学・幸坂健太郎

幸坂さん

お返事（ご回答）ありがとうございました。ご回答の「続き」も楽しみにしておりますので、またご連絡くださいね。

ホームページの【お便り】をご覧いただくと、この十年間の歩みをふりかえることができますが、国語教育に関していえば、十年前の時点ではまだ「コミュニケーション」が前面に出されていて、「論理的思考力」の存在感は薄かったように記憶しています。学校教育の現場では、十年間の試行錯誤を経て、この問題意識にたどりついた、ということなのかな？と感じました。いずれにせよ、学校教育（国語教育）の現場で私の提案が何らかの形でお役に立てるとしたら、そんなにうれしいことはありません。今後の展開を楽しみにしております。

ところで、成田秀夫先生がご紹介くださったというお話は意外でしたが、たいへん光栄です。私からも、ぜひ、よろしくお伝えください。

牧野由香里

つづく

広島大学教育学研究科・幸坂健太郎です。以前先生に送らせていただいた疑問点について、頂いたヒントをもとに考えてみました。自分なりの回答をお送りいたします。お忙しい時期とは存じますが、お時間の都合が宜しい時にまた返信くだされば幸いです。

まず、幸坂の質問1に、自身で回答します。

表 6. 6 の「明示的～語りの」は、あくまでも言語化・非言語化されたメッセージそれ自体の性質である。そのメッセージが、「送り手」「受け手」という関係の中で捉えられるとき、その「明示的・弁証的」という性質は「受け手」にとっての「証明」となり、「暗示的・語りの」という性質は「受け手」にとっての「物語」となる。p.157 の図 7. 6 では、自我 世界間、すなわち自我と他者との関わりを捉えている。よって、表 6. 6 における「明示的～語りの」という性質は、「証明」「物語」という語に置き換えて、図 7. 6 に位置づけられるべきである。

次に、幸坂の質問 2 に、自身で回答します。

まず、p.135 の図 6. 8 をより詳しくしたものが p.318 の図 13. 1 であることを確認する。すなわち、この 2 つの図は、基本的には同じものを指している。そして、これらの図と p.156 の図 7. 5 も、(球とそうでないのとの違いはあれ) 同じものを指していると考えられる。以上より、図 7. 5 は、球である図 6. 8・図 13. 1 と同じ図なのだから、球のような四角、すなわち立方体を二次元に書き表したものであるということになる。幸坂が質問で述べた 3 つの型のどれでもなく、立方体という理解が正しい。

—

—

幸坂健太郎さん

こんにちは。だいぶ理解が深まりましたね。ここまで突き詰めて考えたらもう十分だろうと内心は思いますが(笑)、念のため、私のほうでも若干補足しますね。

<回答 1 >

おっしゃる通り「メッセージそれ自体」を表しているのが第 3 層です。ただ、「証明」「物語」という概念は、実は「メッセージそれ自体」という狭義に加えて、広義の意味では、この本で一貫して取り上げている「仮

説的二極」を同時に表しています。つまり、ミクロの意味とマクロの意味とを併用して使い分けていることが、ややこしさの原因なのだろうと考えました。

マクロの意味で用いている「証明」「物語」は、言い換えれば、「実証主義」「経験主義」という概念を象徴するキーワードです。「小宇宙」(p.135)の球を貫く一本の軸の両端にある相対的な二極を表しています。ですから、端的に言えば、金太郎飴のようにどこを切っても「証明」「物語」なのです。

さらに、「メッセージの共同構築」(表 6.6)では「送り手」と「受け手」という視点が加わりますが、ここで強調したいのは【納得】と【解釈】の対比です。すなわち、「受け手が【納得】することによって【証明】というメッセージの共同構築が成立し、受け手が【解釈】することによって【物語】というメッセージの共同構築が成立する」ということを表そうとしました。

(すいません。今、手元に本がないので、「納得」や「解釈」といった表記は多少ずれているかもしれませんが、考え方はそういうことです。)

< 回答 2 >

はい、みな同じものを指しています。最終的な全体像は球なのですが、たとえば第 15 章になると、「自我 - 世界」の階層構造に加えて、4 つの方角(体系・意味・価値・身体)や、4 つの辺(対話のシステム、対話のルール・責任、共同体の絆、意味と価値の深化)を強調する必要が生じてきます。これらの概念は、円(球)ではどうしても表現しきれないので、正方形(立方体)で表すほうが便利です。

そういうわけで、そのとき一番強調したいことを一番表現しやすい形で描いた結果、正方形(立方体)と円(球)の併用という形になりました。けれども、それが読者のつまずきになるというのはご指摘を受けるまで気づきませんでした。正方形(立方体)と円(球)の併用について、ど

ここに明記しておくべきだったと反省しています。貴重なご意見をありがとうございました。

ちなみに、ホームページの【プロフィール】の中ではいただいた書評を掲載しています。ここに「国語教育の観点からの書評」という位置づけでリンクをはらせていただきますね。専門家からの書評だけでなく、幸坂さんのような立場の方からの書評もたいへん貴重です。改めて、どうもありがとう。

牧野由香里

牧野先生

お忙しい中、かつ一大学院生のメールに対して、本当に丁寧に対応していただき、感謝しています。先生のおかげで、少しずつ先生の著書の内容・意義が理解できてきました。先生の著書には、論理的思考力がなぜ必要なのか、どのような文脈の中で求められるのか、ということに対する一つの答えがあります。それを国語科教育でどう生かしていくか、今後とも考えていかななくてはならないなと感じております。

先生のホームページを拝見いたしました。本当に私のメールを引用してくださっていて恐縮いたしました…。でも、とても嬉しかったです！ありがとうございます。

もしまた著書についてお伺いしたいことがありましたら、連絡させていただくことがあるかもしれません…。申し訳ないのですが、その際にはまたよろしく願いいたします。本当にありがとうございました。

幸坂健太郎

『「議論」のデザイン』メモ
<http://tomag.exblog.jp>

Date : 2009. 10. 31.
Writer : tomac
Publish : exblog.jp

Copyright by exblog.jp and Writer

published by exblog.jp in Tokyo, Japan